

令和 4 年 9 月 1 日現在

機関番号：32699

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00175

研究課題名(和文) 拓本技術を用いた植物画をめぐる美術と博物学の相関性に関する研究

研究課題名(英文) Trace of Natural Objects as Art : Consideration about "Inyo-zu" (ink-rubbing prints)

研究代表者

今橋 理子 (IMAHASHI, Riko)

学習院女子大学・国際文化交流学部・教授

研究者番号：70266352

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：これまで日本においては、19世紀以前には「印葉図」の作例は存在しないと考えられてきた。しかし本研究では、主に2つの事例を発見したことにより、印葉図が17世紀後半には日本に存在していたことを証明した。この事実は日本美術史上における新しい発見であったのみならず、科学史研究においても新発見となり、従来の学術的言説を改める必要性を促すものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

美術史的な実証方法を導入することにより、従来の科学史や植物学史では見落とされていた「印葉図」の技術的価値を再評価すると共に、その技術が「19世紀以前には日本には存在していなかった」かのように言説として繰り返されてきていた植物学研究上の問題を、改めるきっかけを促した。また従来では「美術史」と「科学史」は別々の学問ジャンルとされるが、それぞれにおける研究成果を援用することによって、歴史の隙間におぼれ落ちてしまった新事実を明かし、例えば「秋田路摺」のような一地方における民間工芸を、歴史的に価値ある「伝統芸術」として再評価できる可能性を実証した。

研究成果の概要(英文)：Until now, it has been thought that there was no example of "Inyo-zu" (ink-rubbing) in Japan before the 19th century. However, in this study, I proved that this kind of printmaking technique existed in Japan in the latter half of the 17th century by discovering two main cases. This fact is not only a new discovery in the history of Japanese art, but also a new discovery in the study of the history of science, urging the need to revise conventional academic discourse.

研究分野：日本美術史(近世絵画史)、比較日本文化論、日本博物学史

キーワード：印葉図 日本博物学史 長澤蘆雪 江戸時代博物図譜 秋田路摺 さく葉 押し花・押し葉 植物学史

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

近代生物学以前の科学である江戸時代博物学が、自然科学のみならず芸術に対して及ぼした影響の深さについては、1970年代の上野益三(生物学史)、木村陽二郎(植物学史)らの見解を先鞭として1980年代以降本格化し、とくに比較文学・比較文化研究の芳賀徹および内藤高らの研究を基礎として、美術史学分野にも波及した。そして2000年代に入ってその文化的価値については、展覧会などを通じて一般にもようやく広く認知されるようになった。ターニングポイントとなったのは、群馬県立館林美術館「植物画(ボタニカル・アート)の世界」展(2005年4月)および東京藝術大学大学美術館「500年の大系・植物画世界の至宝展」(同年6月)の2つの展覧会が挙げられる。18-19世紀の世界的潮流とも軌を一にする江戸時代博物学の文化現象は、副産物としての博物画(博物図譜)を大量に生み出すだけでなく、画家たちに対しては自然物を微細に、かつ忠実に紙面上に再現しようとする眼差しと、その「描き込む」高度な描写技術ももたらすことになったのである。描写することへの強烈な執着とも言えるこの「博物学的視線」は、例えば18世紀後半に誕生した秋田蘭画派や円山四条派のような写生画派、また司馬江漢らによる腐食銅版画作品の中にも顕著に認めることができる。このように江戸時代博物学および博物図譜への再評価は科学史的には当然のこと、美術史的にも日本近世期における「現実認識を問い直す、きわめて新しい視点をもたらした。

こうした先行研究の学術的背景を受け、研究代表者はこれまで18世紀後半の西洋科学の移入によって著しい変化を見せた「花鳥画」ことに秋田蘭画派に代表される洋風画や写生画、また大名庭園画や動物画の分野について追究してきた〔拙著『江戸の花鳥画 博物学をめぐる文化とその表象』(1995年)、同『江戸絵画と文学』(1999年)、『江戸の動物画』(2004年)など〕。その研究上で明らかになったことは、江戸時代画家たちにおける「美術写生」と「科学写生」の未分化な認識であり、「博物写生」を芸術創作上において引用、応用することが、決して江戸時代では特異なことではなかったという点である。博物学と芸術のこれほどに密接で直接的な関係は、他国の例をはるかに上回っていると言って過言ではない。本研究課題では、このような国内外の学術的背景を踏まえ、「博物図譜」と「芸術的絵画」の境界上に存在している「印葉図」という絵画ジャンルの存在を指摘し、日本近世絵画史上における位置づけを初めて試みるものである。

「印葉図」とは、生の植物の葉や茎、花などに直接墨や絵具を塗りそれらを紙に押しつけたり、あるいは拓包(タンポ)などを用いて拓本を採るように墨をつけて叩き、紙にその植物の形を写しとったものをいう。簡単に述べれば、印葉図とは植物の「拓版画」であると言える。科学史、特に植物学史においては、「印葉図」は植物図譜の制作方法(版画による植物図の制作方法)のひとつとして明らかに認識されており、ヨーロッパでは15世紀にはすでに存在していたことが知られている。ボタニカル・アートに関するウィルフリッド・ブランクの名著『植物図譜の歴史』(Wilfrid Blunt, *The Art of Botanical Illustration: An Illustrated History*, Collins, 1950. 日本語版初版は八坂書房、1986年)でも、17-18世紀ヨーロッパにおける「印刷」による植物画譜の普及とその絵画としての精度に関する分析はかなりの紙数を割いて述べられており(同書第11章)、とくにその中でも「印葉図」についてはリンネ著『植物哲学』との関係の中で重視され、印葉図制作の技術的発展とその思想的背景についての(歴史化)が図られている。しかしながら従来の日本絵画史における認識では、「印葉図」は、版画はおろか絵画ジャンルとしてもそれ自体に含められてきた形跡はなく、一方自然科学的な「博物図譜」としての価値判断も、実は曖昧なままにされてきた絵画だと言える。日本における「印葉図」の文化的意義については唯一、水谷豊文や伊藤圭介に代表される「尾張嘗百社」との関係りで指摘されてきた。19世紀後半に活躍した嘗百社の博物学者たちは、標本としての印葉図を多用しこれを「真影」とも呼んだのだが、これは現代に言うところの「写真」photography とほぼ同義に見做していた表れ という点が指摘されている(福岡真紀「嘗百社と写真 統合された写真史に向けて」、『近代画説』21号、2012年12月)。つまり現在の美術史的認識としては、あくまでも印葉図は「写真」の技術的先駆として指摘されるのみで、絵画それ自体との関係性は実は曖昧なままとなっていた。

2. 研究の目的

いずれにしても科学史的認識としても、日本における最も古い「印葉図」の作例は1810年代のものとなされ、19世紀以前の作例は「存在しない」と見做されている。しかし研究代表者は長年多くの江戸時代博物図譜を研究としてきた経験の中で、18世紀博物図譜の中にも多くの「印葉図」とみられる植物画の遺存例があることをすでに確認している。このように日本においては絵画芸術としての認識が曖昧となっている「印葉図」は、科学史的にもその存在位置が見誤られている状態にあると言える。なぜにこのような認識がそのままのものとして、現在も放置されたままにあるのだろうか。日本においても、科学史と美術史学の二つの領域にまたがって存在して

いる「印葉図」という植物画への歴史認識を、本研究課題では新たにさせてゆくことを目指した。

3. 研究の方法

本研究課題は2018年度より4年間をかけ実施した。その予備調査の段階で、結果研究代表者は、博物学を愛好した博物学大名たちの周辺に遺されていた古文書類のなかに「印葉図」が含まれている例を数件確認していた。これらはいずれも17世紀の事例であるが、同様の例が他にも複数見出される可能性が高かったため、これらについては2018年度からおよそ2年間をかけて作品調査および歴史文書に関する調査を行った。ただ、2020～2021年度にわたりコロナ禍の影響で当初予定していた実地における作品調査がほとんど困難となったため、所蔵先に依頼しての写真資料の取り寄せやWEB上における情報収集を徹底的に行うなど、調査方法は大幅に変更せざるを得なかった。しかしそれでもいくつかの作品調査を行い、データ収集および写真撮影を行った。こうした調査の成果を元に、2019～2021年度にわたり、成果報告として3編の論文執筆を行い、順次発表した（全てオープンアクセスによる公表）。

また本研究では「印葉図」技術による染織工芸品への応用例について調査を行った。これは日本の伝統的な染色技術とし伝承されてきた「摺染め」などとも部分的に一致している。これについては現在でも同様の技術を伝承している作家がいることが判明したが、やはりコロナ禍の影響で、専門家への聞き取り調査など直接取材を実施することができなかつたため、今後も継続的に試みたいと考えている。

4. 研究成果

日本においては、従来19世紀以前には作例が確認されないとされていた「印葉図」について、本研究では主に以下の2つの事例を明らかにすることによって、印葉図が時代的にはさらに遡って存在していたことを証明した。すなわち、新出の「長澤蘆雪筆秋田落摺絵蟻図」は、筆跡および使用された印章などの鑑定等により、長澤蘆雪が33～34歳頃、つまり天明7年(1787年)2月以降のものと推定される。そのため使用された料紙としての「落摺絵」は、時期的にそれを遡って作成されたものと判断できる。第四代加賀藩主・前田綱紀(1643-1724)は18世紀に数多く輩出された学芸大名の嚆矢的存在であったが、従来その博物学者としての側面については十分に語られてこなかった。本研究ではそこに焦点を当て追究したところ、何と綱紀自身による大量の「印葉図」を旅中日記等から見出すことができた。これらの日記類などは、古くは貞享3(1686)年に書かれたものと認定される。これにより日本においては「印葉図」は、17世紀後半にはすでに植物画の一領域として人々に認識され普及していたことが明らかとなった。

こうした事例により、「印葉図」が日本における植物学研究の方法上において広く認識されていたことが証明されたことはもちろんのこと、印葉図の作成途上で行われる「さく葉」(いわゆる「押し花」や「押し葉」)の技術についても再発見することとなった。すなわち、俳諧文学を愛好する人々の間で、「押し葉」や「押し花」をあしらった料紙を用いて、作品をしたためていた事例を本研究では新たに見出すに至った(楮を漉いて和紙を制作する途上で、押し花を間に漉き込んで作成する、いわゆる「漉き込み」という技法)。これらは博物図譜を作成する上でも応用されていた形跡があり、美術史のみならず日本科学史上においても新たな発見として成果を還元するに至った。

こうした研究成果については前述の通り、2019～2021年度にわたり成果報告論文として3編の論文執筆を行い、順次発表してきた。これらについては全てオープンアクセスによる公表となっている。本研究は2022年現在も継続的に行っており、続編となる研究成果論文の公表を目指して執筆中である。さらに本研究を土台として、研究代表者は新たな科学研究費(基盤研究C)研究課題「美術と自然物標本をめぐる比較芸術的研究」(2022年度より4年間を予定)に従事することになっており、そちらでの研究成果と合わせて単行本(単著)の発行(すでに出版先は決定している)を予定している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 今橋理子 | 4. 巻 20号 |
| 2. 論文標題 「長澤蘆雪筆「秋田落摺絵蟻図」の出現と日本博物図譜史上におけるその意義 近世日本における「印葉図」誕生に関する考察（上）」 | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 『学習院女子大学紀要』 | 6. 最初と最後の頁 11-28 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |
| 1. 著者名 今橋理子 | 4. 巻 10月号 |
| 2. 論文標題 「ボタニカル・アーティストとしての家熙 「花木真写」の科学と美学」 | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 淡交社『なごみ』 | 6. 最初と最後の頁 38-43 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |
| 1. 著者名 今橋理子 | 4. 巻 22号 |
| 2. 論文標題 「印葉図をめぐる埋もれた博物学史 近世日本における「印葉図」誕生に関する考察（中）」 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 『学習院女子大学紀要』 | 6. 最初と最後の頁 15-33 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |
| 1. 著者名 今橋理子 | 4. 巻 24号 |
| 2. 論文標題 「秋田落摺・史実と伝説の狭間に生まれた伝統芸術 近世日本における「印葉図」誕生に関する考察（下-1）」 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 『学習院女子大学紀要』 | 6. 最初と最後の頁 1-19 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計2件

| | |
|----------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 塚本洋太郎作品解説・今橋理子解説 | 4. 発行年 2020年 |
| 2. 出版社 青幻舎 | 5. 総ページ数 292 |
| 3. 書名 『新装版 四季の花』上・下巻 | |

| | |
|-------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 今橋理子 | 4. 発行年 2019年 |
| 2. 出版社 青幻舎 | 5. 総ページ数 204 |
| 3. 書名 『桜狂の譜 江戸の桜画世界』 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|